



「吹き戻し」という言葉を聞いたことがありますか？
では、フーッと吹くとシールシールと伸びて、クルクルと戻ってくる、紙のおもちゃはご存知ですか？なんだか縁日や駄菓子屋などで見か

「吹き戻し」って
なんだろう

けたような。そう、あれが「吹き戻し」なんです。
吹き戻しは、誰もが遊んだことがある、友達や兄弟で吹きっこしたことがある、懐かしいおもちゃ。「そう言えば、最近見かけないなあ」と思っていますか。確かに、現在製造しているのは全国で2社だけです、その約8割を占める淡路島の『吹き戻しの里』

は週末ともなると、家族連れのお客様で大にぎわい。昔も今も変わらぬ、子ども達の笑顔がいっぱいです。



ひゅるひゅる ピーヒャラ

瀬戸内海最大の島、淡路島。
本州へは世界最長の吊り橋、明石海峡大橋が延び、
『古事記』『日本書紀』では
日本で最初に生まれた島として登場。
一番がいつぱいのこの島に、もう一つ、
知る人ぞ知る、日本一があります。
生産量日本一。
健康面でも注目されつつある、
「吹き戻しの里」をたずねます。

吹き戻しの島 淡路





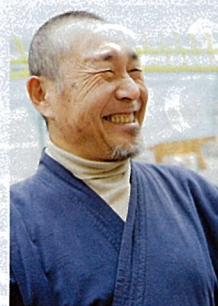
▶お婆ちゃん、お母さんと一緒に、吹き戻し初体験の中村和貴くん(左)、聖児くん(右)。



隣の作業場で製作体験が始まりました。藤村さんの説明を聞く子供たちの眼は、真剣そのもの。簡単そうに見えて、なかなかコツのいる作業。お母さんやお婆あちゃんの手も借りて、子供たちは一生懸命です。

「吹き戻しに使うのは薬包紙といって薬屋さんが使う紙。吹き戻しは正時代の初めに大阪で考案され、置き薬屋さんの景品として全国に広がっていったようです。富山の薬売りは新潟の紙風船、大和の薬売りは大阪の吹き戻し。昔から子供の興味を引くおもちゃなんです。すぐにおもちゃなんです。すぐにこわれるけれど、自分で作れば大事にしたくなる。「体験を通じてそんな気持ちも育んでいきたい」と藤村さんは話してくれました。

これれやすいから 大事にしたい



▲社長の藤村良男さん(上)に吹き戻しの先だけを震わす裏ワザを教えてもらい、大成功の西川杏ちゃん(右)。



単純だから みんなで笑える

『吹き戻しの里』八幡光雲堂が、吹き戻しの製造だけでなく、工場見学と製作体験を始めたのは今から6年前。評判が評判を呼び、今では年間約3万人、夏休みの週末には1日400人を超える見学者が訪れるそうです。「簡単なおもちゃですが、赤ちゃんからお年寄りまで誰もが楽しめる。単純な面白さだからみんな一緒に笑えるんじゃないでしょうか」と社長の藤村良男さん(62)。優しい笑顔で、初めて吹き戻しを手にした西川杏ちゃん

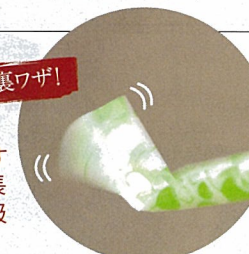
製作体験と工場見学ができる「吹き戻しの里」。ブルーのかなり目立つ建物です。



▲お父さんの吹き戻しは、かなり肺活量が必要な「初日の出」。杏ちゃんと「せーの」でピュ。

とおしゃべりです。「フーッと吹いて。そうそう、ちよっと待ってね。裏ワザやってみようか」。最初は不安そうだった杏ちゃんもおじいちゃんやお婆あちゃんも拍手喝さいを浴びて大喜び。17本もの吹き戻しを一齐に伸ばす「初日の出」に挑戦したお父さんの姿には、ピョンピョン跳ねて大笑い。見ていてこちらまで、楽しくなってしまう。

これが裏ワザ!



▶丸まった「頭」の部分の先端をまっすぐ伸ばして吹くと、ブルブルと振動! 長く息を吐く、この裏ワザは、腹式呼吸にもなり、けっこうお腹にぎます!!

吹き戻し◆作り方

意外と難しい作業。①~⑤の工程だけは、内職の方の手作業で作られます。



1 伸び縮みする「頭」部分の紙を選びます。



2 「頭」のステンレス線にしごき棒を使って巻き癖をつけます。



3 巻きの確認。ゆるい時は再度しごきます。



4 筒につける「頭」の部分を少しふくらませます。



5 筒と「頭」をテープで接着(ラップ)つけて、できあがり。



走り回っていた中村太くんも藤村さんの手元をジュー。「できるかな」とちょっぴり心細そう。



▶「手先の仕事やから(下)年寄りにいい(笑)」と、内職の三古寿々子さん。「私も子供の頃これで遊んどったよ」。



▶体験用の吹き戻し「ひまわり」。他にも「頭大ばく発」「モヒカン」などネーミングも楽しいアイデア吹き戻しがいっぱい。



アイデアマンの血筋

吹き戻しづくりはかつて全てが手作業でしたが、現在は吹いて戻る部分「頭」にワイヤーを貼る工程と、筒の部分「紙管」を作る工程はそれぞれ機械で行っています。そして、この機械を考案したのがなんと先代の社長なのだそうです。

「1950年代後半に特許を取り、量産化に成功。当時はパーティーグッズとして海外に輸出していました。私の代になって

からは、国内販売が中心です。それでもただ販売するのではなく、吹き戻しを使った「ヒゲ」や「ゾウ」「ウサギ」プロ野球応援グッズなど約200もの新商品を発表。2代続きのアイデアマンです。工場には大きな機械が3台。それぞれに職人の方がつききりです。工場は機械作業とはいえ、結構忙しそうです。「紙が相手やから湿気や温度で機械の具合が全然違う。ちゃんと調整したらなあかん」とのこと。藤村さんの眼もひととき厳しく、皆さんの無駄のない動きに町工場の威風を感じました。

1. 職人の方の手と機械がつながっているよう。一時も目が離せません。
2. 筒の緩みや長さもしっかりチェック。
3. 「もうちょっとここを…」製作体験の時とは別人のような藤村さん。
4. この工場で12年。しかし「天候によって、紙の調子が違うもんやから、この仕事にベテランという言葉はないんですよ」。

3.	1.
4.	2.

◀藤村さんと「吹き戻しの里」の皆さん。とても温かい雰囲気の中、皆さんで協力し合いながら吹き戻しを作り続けています。



淡路島の人働き者

「うちは1971年に大阪から淡路島に移りましたが、内職先が多いのも理由の一つ。吹き戻しづくりにはどうしても人の手が必要なんです。淡路島の人とはとにかく働き者だから」という藤村さんに紹介してもらい、島内に約30名おられる内職の方の一人、三古寿々子さんのお宅を訪ねました。

三古さんは現在79歳。10年前まで藤村さんの工場で機械を動かしていたと聞き、驚いてしまいました。「内職だって私よりうんと年上の人もいるよ。年とって腰も痛いけどなあ、なんぼ痛くても時間あったらコレ(内職)がしたくなる。主人から『お前は箸置いたらコレ作っとる』と笑われます」。なるほど、確かに働き者です。「じつとしておれ

んから。コレさしてもろうてありがたいわ」。ごく自然に、普通に、生涯現役。その気負いのない笑顔、かなわなないなと思いました。

玩具から医療器具へ

吹き戻しのこれから



吹き戻しは、置き薬屋の景品として広がり、夜店や駄菓子屋のおもちゃから海外のパーティーグッズへ。そして「吹き戻しの里」では見学と体験を通し、子供からお年寄りまでが一緒に遊び、笑える楽しさを教えてくれます。さらに今、「吹く」というその行為に着目し、口腔ケア等の視点から医療や介護の分野で吹き戻しを使ってみようという動きが出てきているそうです。懐かしいおもちゃが医療器具へ。そんな日も近いかもしれません。